
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 145 号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2004.10.28 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1491 部*****

□ 目 次 □-----

<巻頭言>心を行動に 小泉浩郎

<今週の提言>森林を農業・都市生活につなげよう 安富六郎

<旬を食べる一野良からの便り・11>ギンナン(翡翠の首飾り) 小泉浩郎

<79歳の意見>ラジオ深夜便に「栗田キエ子さん」定期出演 原田 勉

<日本たまご事情>

世界たまご屋会議 IEC (International Egg Commission)—その2—

愛鶏園・齋藤富士雄

<編集後記・同人の近況報告>10月14日~10月27日

<巻頭言>心を行動に

中越地震被災者の皆さん、心からお見舞い申し上げます。

美味しい米どころ中越、暖かいご飯とみそ汁、一家団欒が1日も早く戻ります
ことをご祈念いたします。

遠い海外の話ではない。普通なら1時間とかからぬ所に、10万人余の方々が
餓えと寒さに耐え、避難生活を余儀なくされている。この文明国日本での、現
実の今の状況なのだ。

新幹線、高速道路、携帯電話、電気、ガス・水道路線の整備は、日常の生活
を便利にした。それが豊かさだと思っていた。だが、それは物であり、いつか
は壊れ、自然の猛威の前には万全ではない。自慢の新幹線にも限界があった。

その時、試されるのはもう1つの豊かさだ。放映される姿に心を痛めるなら、

その心を行動に移すことだろう。サマワでは自衛隊が汗を流している。すぐ隣では、目の前に迫る冬の足跡におびえ、不安な毎日を送っている。義援箱への1枚のコインでも良い。いまこそ、日本人として、けっして失っていない心の豊かさを、優しさを証明する時のように思う。

小泉 浩郎

山崎農業研究所事務局長

y.noken@taiyo-c.co.jp

<今週の提言> 森林を農業・都市生活につなげよう

群馬県鬼石（おにし）町での山崎農研現地研究会（9月25日「現地に学ぶ：森林とのつき合い方」）に参加した。山には木が沢山ある。それなのに森林面積が約65%の日本が木材需要の80%以上を外国に頼っている。どうしたことだろう。経済の仕組みといえればそれまでと思うだろうが、安価なものの背景には環境の質の低下（このなかに世界に広がる貧困も含まれる）という莫大な代償が払われている。

最近、中国からの木炭の輸入がなくなると聞いた。この林地が少ない国から木炭を輸入していたことがむしろ不思議である。戦後、大企業は経済力に任せてアジアの国々から大量の木材を輸入した。タイではかつて高価なチーク材の運搬のために周囲の森を広く切り払った。フィリピンでは乱伐の愚かさに気がついて今や国家規模で森林再生を進めている。インドネシアでは林業と農業を結びつけて山村に明るい未来を描こうとしている。世界では森林・農地・都市との共生が大きな課題となっている。森林こそ豊かな大地の富の源泉であり、気候異変にも関係するという巨大な環境調節機能を正しく理解し、そして利用しようということである。

ところでわが国はどうであろうか。育林に重要な間伐もできず、森林は荒れ放題となっている。このような状況に何とかして森林を守ろうとする人がいた。努力の結果、経済的でしかも環境保全にも良い鋸谷（おがや）式の育林・間伐方法（山崎記念農業賞受賞2004年）が開発された。この方法で育った森林を鬼石町に見ることができる。森林を安らぎの場とするさまざまな企画も行われている。ここでは林業のみならず自然環境のバランスの保持や、環境教育の場などのすばらしい森林の機能が活かされている。

最近、都市の中に林地を保全する町も増えてきたことは心強いことであるが、木材の完全自給を目標に全国の森林が新しい育林法で管理されれば、空気は清浄に、水は豊富になり、都市と農村の交流もできる快適空間になることをこの現地は教えている。

安富 六郎
山崎農業研究所会員、土地利用学
y.noken@taiyo-c.co.jp

<旬を食べる―野良からの便り・11> “ギンナン（翡翠の首飾り）”

近所に大きなイチョウの木があった。子供達の遊び場であり、葉が黄色く色づく、ギンナン拾いを楽しんだ。特有な匂いがあるから、実の柄をそとつかんで袋に入れた。それからがたいへん。実をつぶしながら庭先の土に埋め、1週間後ごろ、土と混ぜながら掘り出した。土の力で匂いは消えていたような気がする。それを水洗いして天日で干した。

その思い出のイチョウの木も今はない。木陰や落ち葉の被害を少なくしようと屋敷の大木は、競って切り倒された。それでむらは明るくなったが、風情のない殺風景な景観となってしまった。

ギンナンは、少し傷をつけ、囲炉裏で焙烙（土製のフライパン）で焼いた。透き通るような翡翠色ともっちりとした食感、つい手が伸びると父親の言葉が飛んだ。「子供は5つまで」。ギンナン食中毒は子供に多かったらしい。

旬の炒りギンナンが最高だが、こんな食べ方もある。割れ目を入れたギンナンを封筒に20粒ほど入れ、口を2〜3回折る。これを電子レンジで1分加熱。取り出して塩でいただく。

このところ、イチョウ（葉）ギンナン（実）は、健康食品わけても脳内活性食品（ブレインフード）として高齢者に人気がある。ボケ防止のために、まずは種子から育てよう。実がなるまで20年以上かかるというからボケるわけにはいかない。

小泉 浩郎
山崎農業研究所事務局長
y.noken@taiyo-c.co.jp

<79歳の意見>ラジオ深夜便に「栗田キエ子さん」定期出演

NHKラジオ深夜便放送には多くの愛好者がおられると思う。私も眼が不自由になってから、テレビや新聞よりラジオを愛好するようになった。

10月14日午後11時20分からの「日本列島くらしの便り」は、山形県金山町の栗田キエ子さんの懐かしい声だった。司会者は、NHKでも有名な斎藤季夫アナウンサーで栗田さんとの掛合問答が面白くなってすっかり眼がさめてしまった。

金山町の栗田和則・キエ子夫妻は、1997年 第22回山崎記念農業賞の受賞者で、私たちは現地研究会にも14人が参加し、栗田さんが建てたログハウスに泊まったことがある。また、栗田さんが栽培している「なめこ・まいたけ・タラの芽」などの山菜の恩恵にあずかっている。

夫妻は、東北山村にあつて春から秋は米づくり、冬は山仕事をし、自然を生かした暮らし方を探求し、なめこ・タラの芽の栽培で仲間をつくりログハウスには「暮らし考房」と名付け、地域や都市市民が集う場として活かしている。

キエ子さんは、草木染め藍染の体験実習を主催している。

この夜の話も草木染めの材料になる山野の草木の「実の旅仕度」という話を中心だった。夏に咲いた山芍薬の種は、さわると実がはじけ飛ぶ。というように、ほうの木・くさぎ・つるぎもどき・冬の花わらびなど、子孫繁栄のために風や自然の中に飛ばされて行くさまをおもしろおかしく語っていた。自然の営みに山神様の姿が浮かぶような山村風景であった。

前回の9月9日の話は、ログハウスに行く道で、ハンミョウ（別名 道しるべ）に出逢ったこと。まさに道しるべになるように、行く先々を飛んでゆくさまを語っていたが斎藤アナも辞書をしらべ、ハンミョウは斑猫（まだらのねこ）で書くんですね。と応じ、「先輩に聞くとかなり名の知られた珍しい昆虫ですね」ということで大笑いになった。そして都会周辺では、珍しいものになってしまったという。私も実は知らなかった。

この後、「静かな 静かな 里の秋」という歌を聞きながら眠りについた。
皆さんもの毎月第2木曜日の夜、NHKラジオ11時20分からの「日本列島くらしの便り」で栗田キエ子さんの話を聞かれたらいかがでしょうか。

◆参考図書<山崎農業研究所>『耕』75号 1997年 1000円+税

◆参考リンク

日本特産農産物協会 平成13年度地域特産物マイスター認定者ページから
写真付きプロフィール

http://www.jsapa.or.jp/tokusan/m_ninteisha13.html#1

農業共済新聞 2002.1.30

http://www.jsapa.or.jp/tokusan/m_tsushin3/news/noukyou05.html

金山町山里自然体験/暮らし工房

<http://www.vega.ne.jp/~kaneyama/taiken/kurashi.html>

河北新報 2000年11月特集「風の肖像 (かぜのかたち)」<むらと人>

<http://www.kahoku.co.jp/spe/spe083/20001109kz.htm>

<http://www.kahoku.co.jp/spe/spe083/20001110kz.htm>

<http://www.kahoku.co.jp/spe/spe083/20001111kz.htm>

朝日ウィル 2001年6月5日号 体験交流と民泊を地域に広げた、森の哲人

<http://www.asa.co.jp/will/will/backnumber/010605.html>

都市農村交流データベース 栗田キエ子さん

<http://jinzai.kouryu.or.jp/agri/datadspseyousai.asp?id=34366>

食と農の応援団 栗田和則さんプロフィール

<http://www.ruralnet.or.jp/ouen/meibo/051.html>

INSECTS AND CAVES - 日本や世界のハンミョウを写真で紹介

<http://homepage3.nifty.com/trechinae/>

NHKラジオ深夜便

<http://www.nhk.or.jp/radiodir/shou/shinya/shin.html>

『電子耕』 No.60-2001.06.14 号

<http://www.nazuna.com/tom/2001/60-20010614.html>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田勉

<http://nazuna.com/tom/>

参考リンク:原田太郎

<日本たまご事情>

世界たまご屋会議 IEC (International Egg Commission)—その2—

会議のメインテーマはいつも一貫している。「どのようにしたら鶏卵の消費を増やせるか？」である。国々によって鶏卵事情は異なるが、ここに参加している者たちにとってそれは共通のテーマなのだ。サブテーマはその年によって異なるが、それは「動物愛護問題」であったり、「鶏卵のサルモネラ問題」であったりする。日本の鶏卵業界は今「鳥インフルエンザ問題」で持ちきりであるが、残念ながらこの大会ではあまり話題にならなかった。ある国にとっては死活問題のことが、他所の国ではまるで関心がない。世界はまことに広いのである。

大会の出席者リストを見てみると、どうやら日本からのそれは私ども夫婦だけであるらしい。鶏卵生産大国の一つとしては寂しいかぎりだ。いつも日本から3-4名の参加があり、日本を代表して桜井タクジ先生が孤軍奮闘、日本の鶏卵事情を世界中の関係者に説明されていた、今年は体調をくずされ参加されていないという。会う人ごとに「Dr. Sakurai はどうしているのか？」と聞かれる。

大会の中日、一日かけて参加各国の鶏卵事情をそれぞれの代表が10分以内で英語で説明することになっている。今までは桜井先生がこの部分を担当されていたので安心して聞いていられた。これはまずい事になってきた。日本からの参加者が一人だとするとこの役が私に回ってくる！？案の定、ノルウェーの担当役員がやってきてそのことを私に告げた。いつのまにか私は日本代表ということになってしまった。

発表の前日にそれを告げられたとは言え、発表するにはそれなりの準備がいる。用意の良い国は、プレゼンテーションにPCを使い見事にそれをやってくれる。なにも用意することなく、呑気に大会に参加したことを悔いたがもう間に合わない。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp>

<編集後記・同人の近況報告> (10月14日~10月27日)

前号(144号)の編集後記で台風22号の被害について書いたが、その後、台風23号が兵庫県豊岡市などに大きな水害をもたらした。そして10月23日、今度は新潟県中越地方を大地震が襲った。最初の地震から4日たった26日現在、10万人以上が避難所生活を強いられている。こうしたなか、自治体や警察・消防・自衛隊、医療機関はもちろんのこと、ボランティア・NPO等が積極的うごいている。台風も地震も天災であり、それ自体避けようがない。だが、その被害を抑えるのも、そこから立ち直る原動力となるのも「人」である。災害に遭われた方々にはあらためてお見舞い申し上げます。

(山崎農業研究所会員・田口 均)

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

- 1、件名(見出し)を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。
- 5、JIS X0208 規格外の文字(機種依存文字)のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 146号の締め切りは11月8日、発行は11月11日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしく願い致します。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第145号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2004.10.28（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』 *****